

改めて確認された博多湾岸の倭弥呼の宮都

[①改めて確認された博多湾岸の倭弥呼の宮都@正木裕@和泉史談会](#)

[@20211215@和泉市コミュニティセンター@29:01@DSCN0382](#)

<https://www.youtube.com/watch?v=YZynRCV-2do>

[②改めて確認された博多湾岸の倭弥呼の宮都@正木裕@和泉史談会](#)

[@20211215@和泉市コミュニティセンター@23:46@DSCN0387](#)

<https://www.youtube.com/watch?v=GFYnCM-ARR0>

[③改めて確認された博多湾岸の倭弥呼の宮都@正木裕@和泉史談会](#)

[@20211215@和泉市コミュニティセンター@08:11@DSCN0388](#)

<https://www.youtube.com/watch?v=dFAoNgkkeVw>

[④改めて確認された博多湾岸の倭弥呼の宮都@正木裕@和泉史談会](#)

[@20211215@和泉市コミュニティセンター@25:07@DSCN0390](#)

<https://www.youtube.com/watch?v=g3iDBzaS04s>

[⑤改めて確認された博多湾岸の倭弥呼の宮都@正木裕@和泉史談会](#)

[@20211215@和泉市コミュニティセンター@09:21@DSCN0395](#)

<https://www.youtube.com/watch?v=og5WnOoaw1k>

奈良新聞 令和3年(2021年)12月28日 火曜日 企画 6

[「邪馬台国九州説」-有力- 考古学・科学分析で確実に](#)PDF

改めて確認された 博多湾岸の倭弥呼の宮都



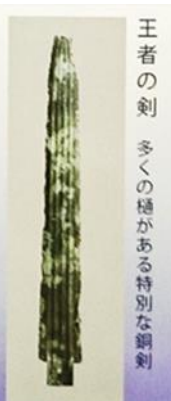
須玖岡本D地点
出土の夔鳳鏡



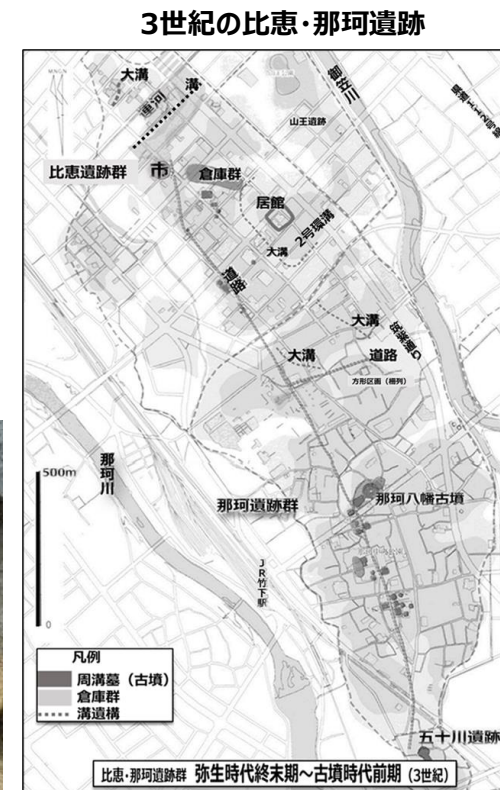
筑前町薬師ノ上遺蹟出土の弥生の硯



昭和4年頃の大石の状況（京都大学発掘調査報告書より）



王者の剣
多くの樋がある特別な銅剣



近年の考古学や科学分析で一層確実となった「邪馬壹国九州説」

2000年代に入り冶金学者新井宏氏らによる銅鏡に含まれる鉛同位体分析で、魏の年号入りの「三角縁神獣鏡」は国産（仿製鏡）で、倭弥呼の鏡でないことが確実となった。

2016年～2020年に、柳田康雄国学院大客員教授らにより、『魏志倭人伝』に記す「文書外交」に必要な墨痕の残る硯が、倭弥呼の時代のもを含め、北部九州・博多湾岸などから次々と発見された。

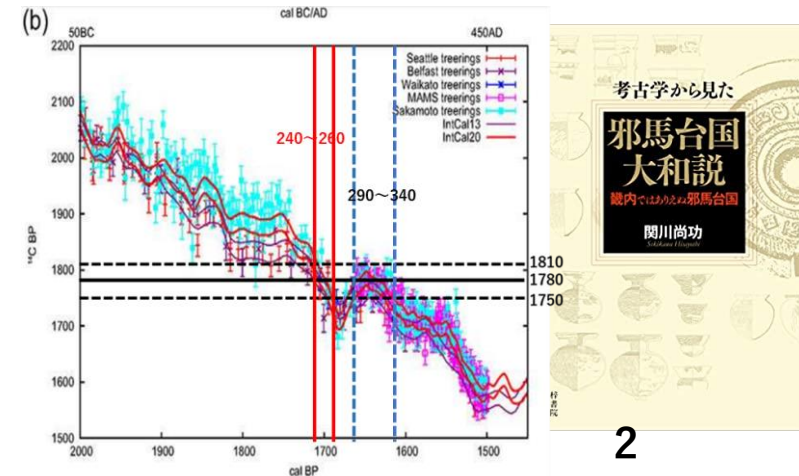
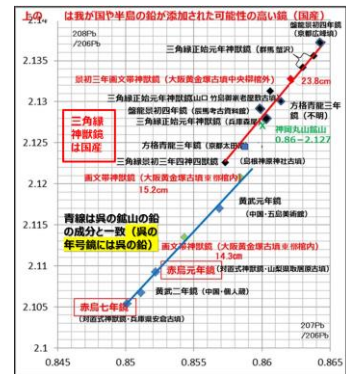
2018年12月に大阪歴史博物館で開催された「古墳時代における都市化の実証的比較研究－大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地（纏向・南郷等）－」総括シンポジウムで、倭弥呼の時代に、全国でもっとも都市化が進んだ地域は、JR博多駅南の比恵・那珂遺跡地域で、他にはなく、『初期ヤマト政権の宮都』とされる纏向遺跡では、そのような状況は依然ほとんど不明である」（福岡市埋蔵文化財課久住猛雄氏）とされた。

2020年8月に採用された炭素年代値の較正曲線（INTCAL20）を用いたC14測定で、以前のC14測定で3世紀倭弥呼の時代とされていた箸墓は、AD300年頃～4世紀前半の可能性が最も高くなった。

2020年9月に、長年、橿原考古学研究所で、長年纏向遺跡をはじめ、多くの大和地域の発掘・調査に携わってきた関川尚功氏が「考古学から見た邪馬台国大和説 畿内ではありえぬ邪馬台国」（梓書院）を出版。「邪馬台国の存在を大和地域に認めることは出来ない」との結論を出した。



福岡比恵遺跡出土の3世紀の硯

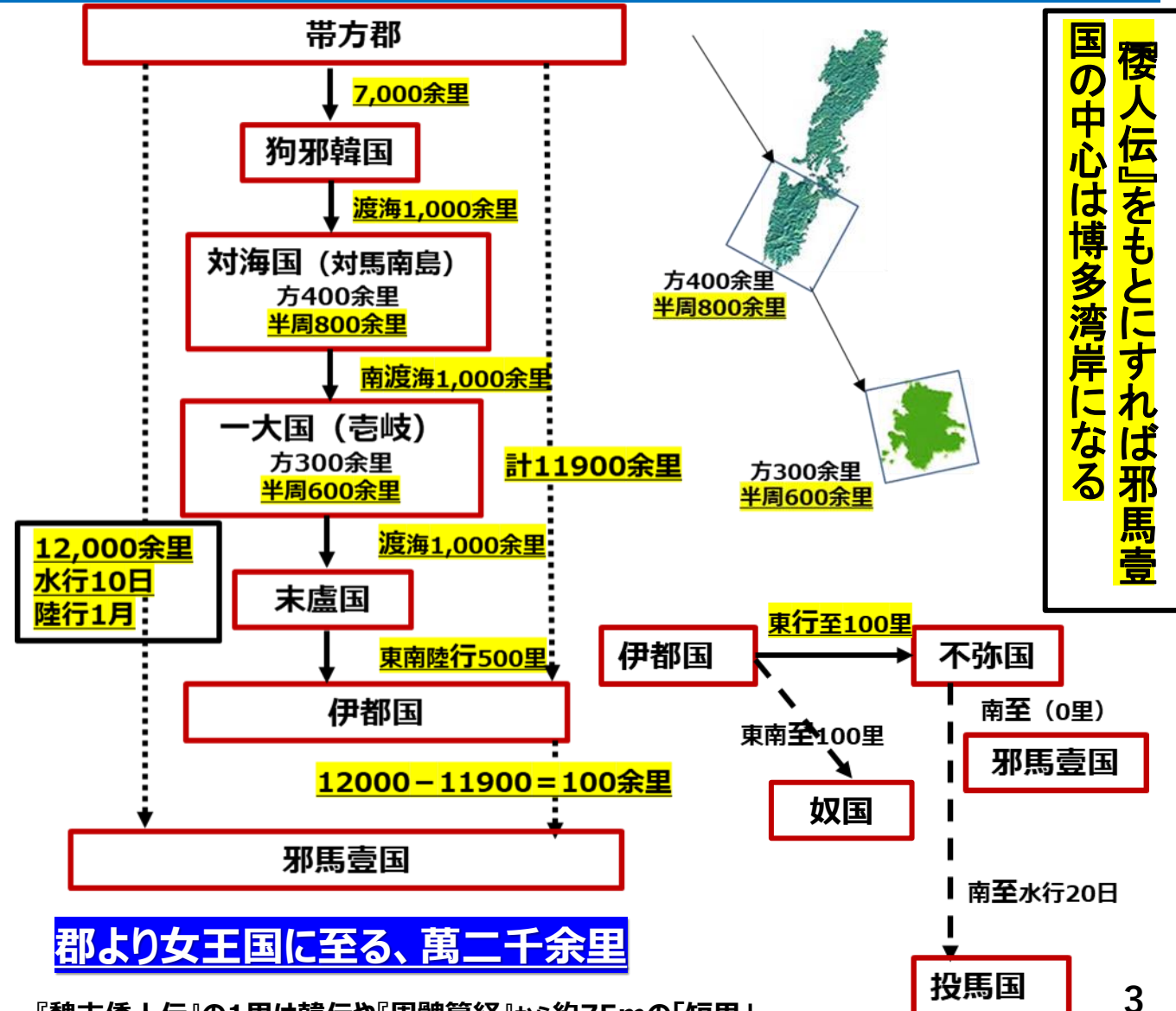


文献から探る倭弥呼の王都＝『魏志倭人伝』に記す邪馬壹国への里程

邪馬壹（台）国への距離・方位は3世紀倭弥呼と同時代の陳寿の書いた『魏志倭人伝』に明確に記されている

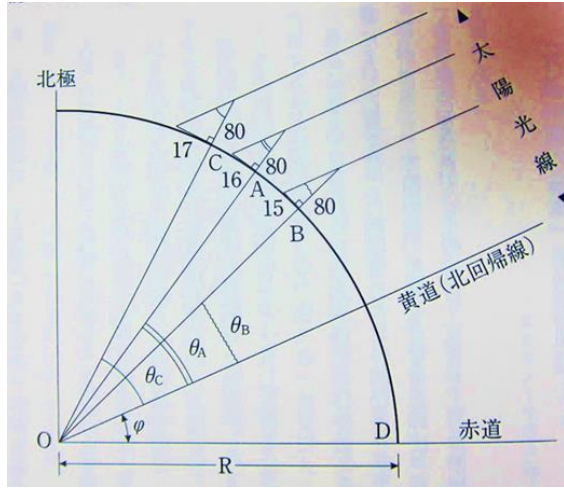
倭人は帯方の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑を為す。旧百余国。漢の時朝見する者有り。今、使訳通ずる所三十国。

- ①郡より倭に至るは、海岸に循(したが)い水行す。
- ②韓国を歴るに、乍(たちま)ち南し乍(たちま)ち東し、其の北岸狗邪韓国に到ること、七千余里。
- ③始めて一海を渡る、千余里、対海国に至る。居所は絶島にして、方四百余里可(ばかり)り。千余戸あり。
- ④又南一海を渡る、千余里、名づけて瀚海(かんかい)と曰ふ。一大国に至る。方三百里可(ばかり)り。三千許家あり。
- ⑤又一海を渡る、千余里、末盧国に至る。四千余戸有り。山海に濱(そ)ひて居る。
- ⑥東南に陸行五百里、伊都国に到る。千余戸有り。世々王有るも、皆女王国に統属す。郡使の往来常に駐(とど)まる所なり。
- ⑦東南、奴国に至る、百里。二万余戸有り。
- ⑧東行不弥国に至る、百里。千余家有り。
- ⑨南、投馬国に至る、水行二十日。五万余戸可(ばかり)り。
- ⑩南、邪馬壹国に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月、郡より女王国に至る、萬二千余里。



「1里約75mの短里」で「陸行1日300里水行1日500里」

①『三国志』韓伝と『周髀算經』（西周時代BC1050年～771年ころ成立の天文数学書）が1里約75mの「短里」を証明（漢代は1里435m。）



◆「一寸千里の法」 周の首都で夏至の南中時に、地面に垂直に立てた8尺の周髀の影の長さは1尺6寸。南に千里では1尺5寸、北に千里では1尺7寸。よって、8尺の周髀に対する影の差一寸は、地上の距離にして千里に当たる。

これを地球の大きさから計算すると1里約76～77mとなる。

②『張家山漢簡』（1983年中国で発掘）の「2年律令（呂后2年BC186年頒布）」が「陸行1日300里行進」を証明（「重車・重負を伝送すれば日行五十里」。短里だと6倍の300里 * 魏・西晋朝の『呉録』『驚牛行日三百里』）

③韓地は野生号の実験（1975年）の失敗で西岸水行でなく「陸行」が正しい（韓国西岸を通り博多まで47日で『倭人伝』の水行10日と合わない）

④水行は古代船の構造や航海実験から毎時5～6km、1日35～40km。千里 = 75kmだから水行1日500里。

『魏志倭人伝』に記す「邪馬壹国」への行程

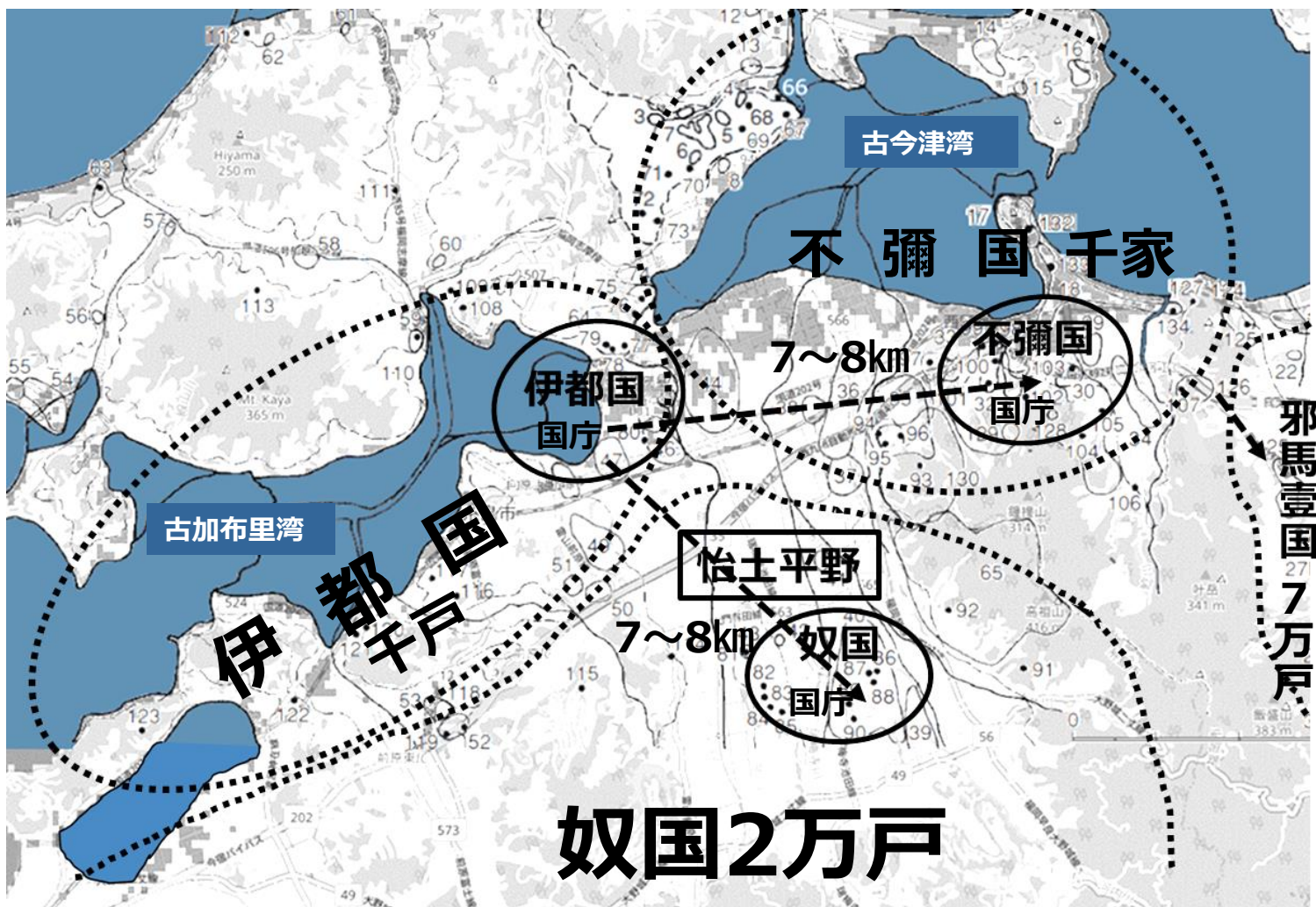


水行十日、陸行一月、郡より女王国に至る、萬二千余里。文献上俾弥呼の王都は博多湾岸にあったことになる 4

『魏志倭人伝』伊都国・奴国・不彌国・投馬国・邪馬壹国の位置と領域

『倭人伝』通りに解釈した伊都国・奴国・不彌国・投馬国・邪馬壹国の位置と領域。

伊都国は古加布里湾岸の軍港国、不彌国は古今津湾岸の交易港国、奴国は怡土平野に国庁を置き肥前全域を包む大国、投馬国は薩摩を中心とする南九州の大国。邪馬壹国は筑紫と豊前・肥後の一部を含む倭人の盟主の大国だった。



それでは、邪馬壹国の中で、倭弥呼の宮城はどこにあったのあ
ろうか？

倭弥呼の王都の所在は倭弥呼の王都にあるべき「物」を探ればよい

明帝からの下賜品

倭弥呼の初回の朝貢品：男生口四人・女生口六人
・班布（織布）二匹二丈（5反）

①倭弥呼へ：金印紫綬と紺地句文錦三匹、細班華罽五張、**白絹五十匹**（100反）、**金八両**（約112g）、**五尺刀**（約120cm）二口、**銅鏡**百枚、**真珠・鉛丹各々五十斤**（約12kg）②使者へ：銀印青綬と絳（コウ・赤）地交竜錦五匹、絳地縞（シュウ・ちぢみ）**栗**（ゾク）**罽**（ケイ・絨毯か）十張、**蒨絳**（センコウ・鮮やかなあかね布）**五十匹・紺青五十匹**

『魏志倭人伝』で邪馬壹国にあるとされるもの

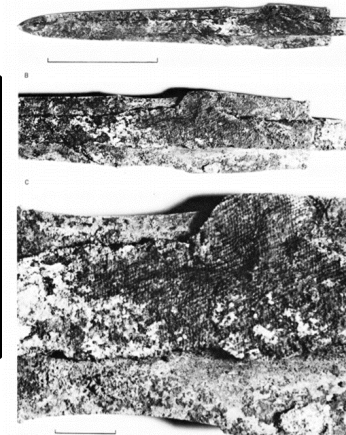
①倭弥呼からの朝貢品：正始4年(243)倭王はまた使の大夫伊聲耆、掖邪拘等八人を遣わし、生口、**倭錦、絳（赤）青縑**（ケン・細織の絹布）、**綿衣、帛布**（ハクフ・厚手の絹布）、**丹、木拊**（モクフ）**短弓**（木製の手束弓）、**矢**を上献す。
②産物：**真珠、青玉**を出す。その山には**丹（水銀朱）**有り。③墓：徑百余歩30m程度の塚。卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。**徑百余歩**。④多数の**甕棺**：**徇葬**する者、奴婢百余人。⑤**武器**：竹箭或いは**鉄鏃**、或いは骨鏃。⑥**文書外交に必要な用具**。一大率が文書、賜遺の物を伝送し女王に詣らす。

王都・宮殿にあるとされる施設

宮室・楼観・城柵・邸閣・市・役所・居館など

宮室・楼観・城柵、厳かに設く。租賦を収むるに**邸閣**あり。

こうした物や施設が存在するところが邪馬壹国・倭弥呼の王都と考えられる



須玖岡本遺跡出土の剣に巻かれた弥生絹



福岡比恵遺跡出土の3世紀の硯

博多区仲島遺跡出土の2世紀後半の漢鏡



一貴山銚子塚古墳の鍍金鏡



吉武遺跡の径25～30mの円墳



比恵遺跡の鉄状板製品



糸島市前原東の上町向原遺跡出土の五尺刀（一二〇cm）



邪馬壹国の遺跡—都市化と比恵・那珂遺跡

俾弥呼の宮都探索に重要な「都市化」

『魏志倭人伝』には倭弥呼の宮都に存在すべき施設が記されている

①宮室・楼観・城柵、厳かに設く、②租賦を収むるに邸閣あり（倉庫）、③国国市ありて有無を交易す（市場）、④大倭（たいゐ）・大夫難升米（なしょうまい）・都市牛利（つしごり）、大夫伊声耆（いしょうぎ）・掖邪狗（やくやく）等の官僚群・官僚組織と執務する役所、兵士（常に人あり、兵を持して守衛す）・奴婢百余人等も含めた彼らの住居・居館⇒倭弥呼の宮都はこうした施設が集約された「都市」であるはず。

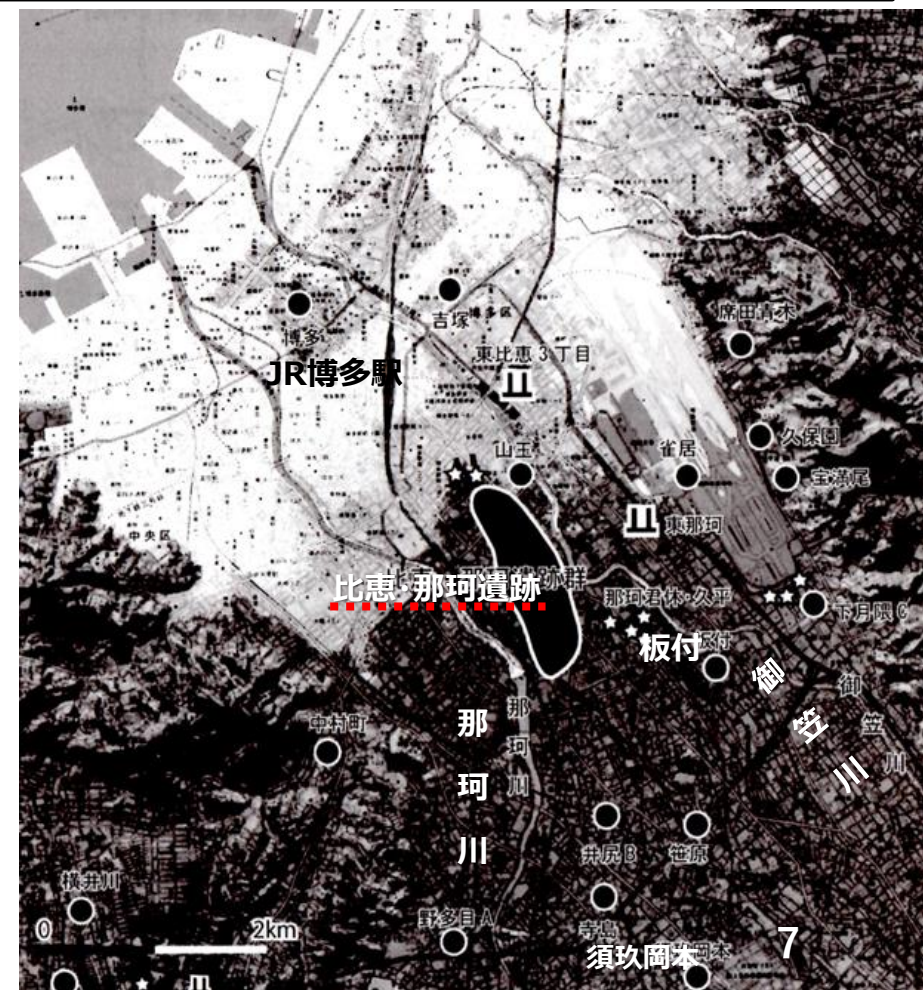
俾弥呼の時代における「都市化」の研究が進展

2018年12月22・23日大阪歴史博物館で「**古墳時代における都市化の実証的比較研究－大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地（纏向・南郷等）－**」総括シンポジウムが開催され「**都市化**」という新たな視点から俾弥呼の宮都の所在が明らかに。報告書はHP大阪市文化財センター⇒研究活動⇒科学研究費助成事業⇒基盤研究C南秀雄で検索できます。

テーマ：列島における弥生時代終末期から古墳時代初頭の大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地の都市化の状況比較

結論：「弥生時代終末期から古墳時代初頭の三世紀（*倭弥呼の時代）にかけて、全国でもっとも都市化が進んだ地域は、JR博多駅南の那珂川と御笠川に挟まれた台地上に広がる比恵・那珂遺跡地域である」「（都市化は須玖岡本にもみられるが、）明確に分かるのは比恵・那珂遺跡群をにおいて他にはなく、『初期ヤマト政権の宮都』とされる纏向遺跡（寺沢薫1984・2011）においては、そのような状況は依然ほとんど不明である」（福岡市埋蔵文化財課久住猛雄氏）

比恵・那珂遺跡とは：弥生から古墳前期に最盛期を迎える古墳群。比恵遺跡は65基、那珂遺跡は83基とされ、合計は吉野ヶ里遺跡の4倍の規模。



邪馬壹国の遺跡ー都市化と比恵・那珂遺跡

「都市施設」が整備されていた比恵・那珂遺跡

① **宮室**（居館）、**楼観**（たかどの・超大型建物）**城柵**（環溝・区画に柵列の遺構）

② **邸閣**（柵付き）**高床式倉庫群**は『倭人伝』の邸閣領域と推定（久住）

③ **「市」**と推定される遺構（石権・辰砂・鉄器・鉄素材・鈴用とみられる小銅鐸・各地からの土器などが出土）

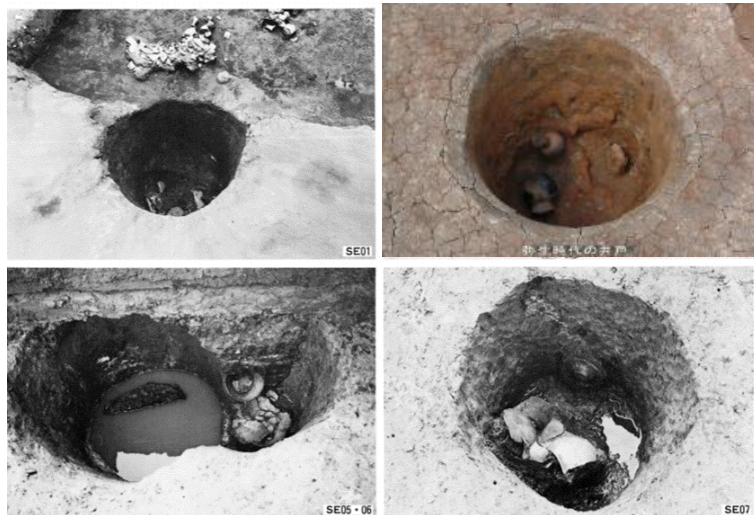


④ 弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけ推定延長2km幅8m、側溝幅1.5m深さ1mの側溝のある**長大な道路**が造営された

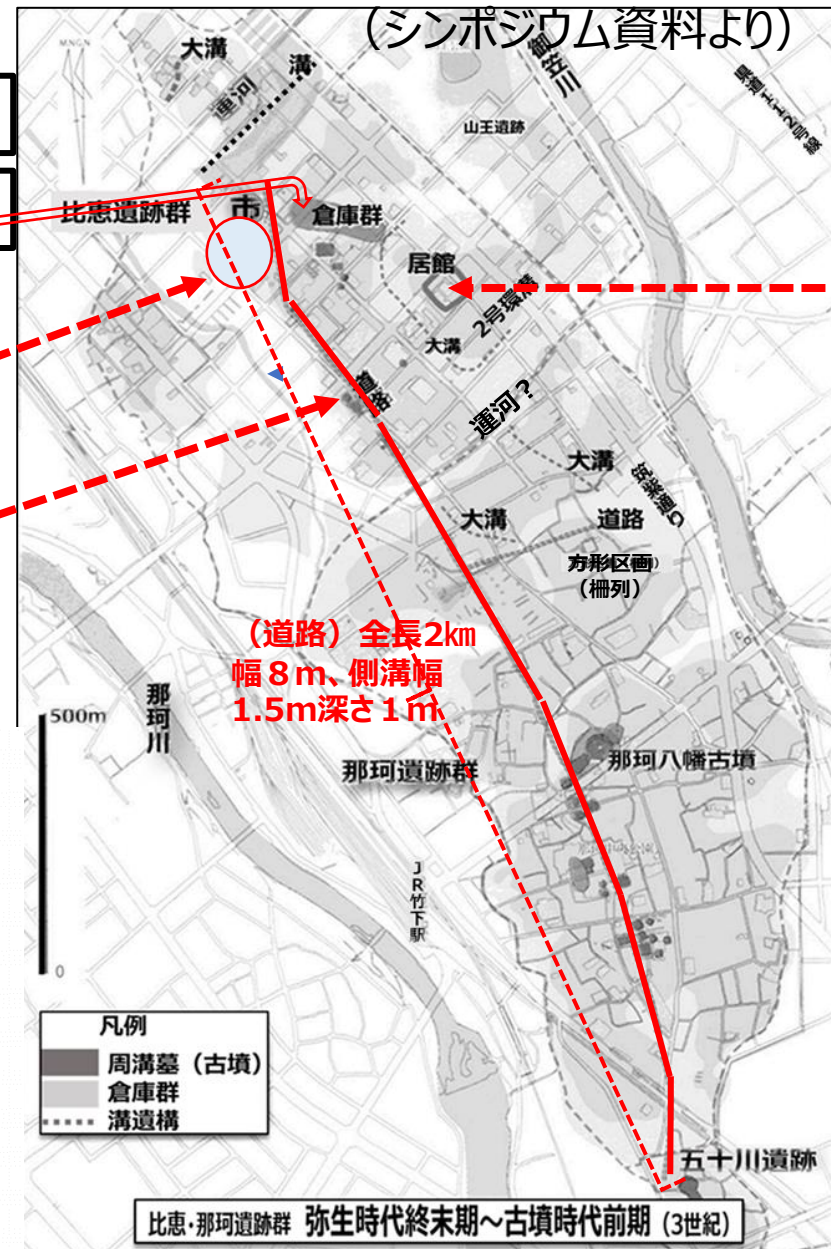
比恵・那珂遺跡は弥生～古墳前期で我が国最大の都市

⑤ 官僚群・兵士・奴婢、交易関係者他を収容する居宅・生活利便施設群は「都市」を形成⇒福岡県の同時期の井戸800中500が存在し人口は少なく見積もっても3000人以上と推定。**弥生終末期以降は「王」が比恵・那珂に移転してきたとみられる。**（久住）

多数の人々の居住を示す井戸群



井戸出土状況1



一号環溝には**超大型建物**があった可能性があり・また二号環溝における大規模化は「**居館**」的な**方形環溝の主が首長から王への変化を示している**とみられる。（福岡市文化財課久住猛雄）**8**

邪馬壹国の遺跡―都市化と比恵・那珂遺跡

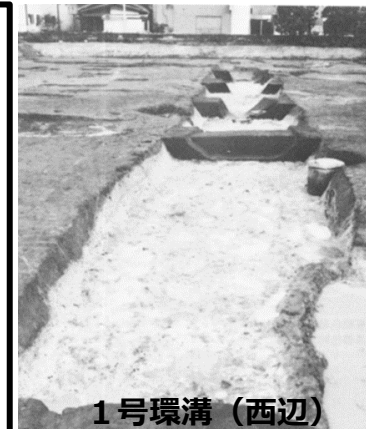
宮室・楼観・城柵、厳かに設く

2号環溝における大規模化は「居館」的な方形環溝の主が首長から王への変化を示す

環溝は4ヶ所。①1号環溝は、東辺33m、西辺36m、南辺30m、北辺30m。幅3～4m、深さ1m程。環溝内には5軒の竪穴住居跡、2基の井戸跡、柱穴群、土壇等が検出されている。

②2号環溝は一辺約70mで、1号環溝と重複。溝は2段掘りで、最大幅は6m、最小幅が4.5～5m、深さ2m程。環溝内は、住居跡、柱穴群から構成されている。

③3号環溝は、2号環溝内にあり、一部2号環溝と重複。規模は一辺約40m、幅は1.3～2.5m、深さ1.5mの方形。④4号環溝は、2号環溝の西北部にあり、一辺90m程。環溝内の遺構については全く不明。⑤5号環溝の規模は、一辺10mの正方形の環溝で、環溝内には2軒の竪穴住居跡が在る。

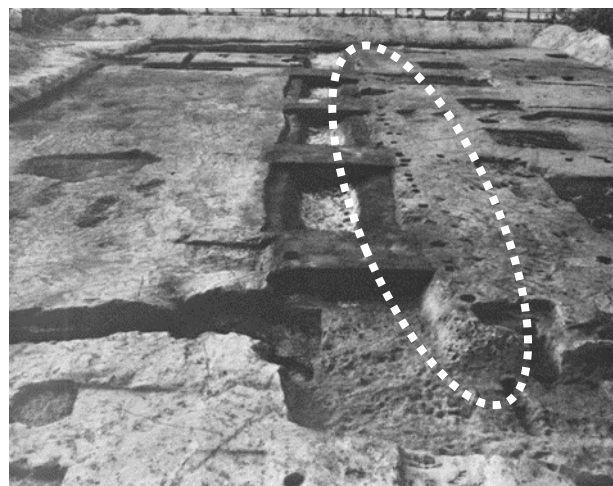


1号環溝（西辺）



1号環溝（南辺）

発掘資料は福岡市教育委員会 1986『比恵遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書ほかによる。



環溝と柵列と住居

環溝内には多くの住居（建物）跡があるほか、削平されて今はない住居址が、環溝内外に広がっていたことは、十分可能性を持つ。



吉野ヶ里の内環溝と柵列



2段掘り溝（広い溝が埋まった後中央にU字型の溝が掘られた。溝の横に並ぶのは柵列の跡）

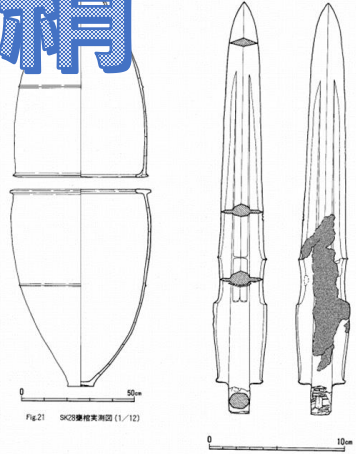


邪馬壹国の物証①一絹（倭弥呼は魏に斑布、倭錦、絳青縑、異文雜錦を献上）

紵麻（ちよま・カラムシ）を種（う）え、蚕桑（さんそう）す。緝績（しゅうせき、糸をつむぐ）して細紵（さいちよ、麻布）、縑緜（けんめん、絹布）を出す

絹

剣に巻かれた弥生絹



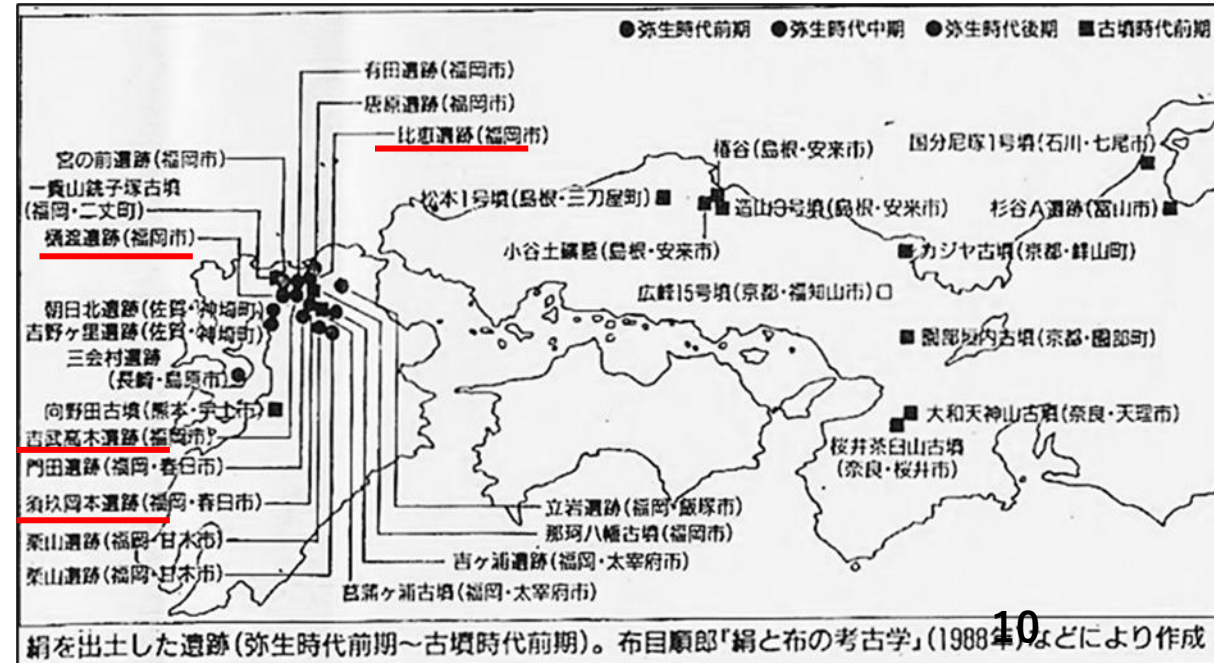
甕棺と甕棺に副葬された絹の巻かれた銅剣

博多比恵遺跡（3C）から出た細形銅剣の刺身に附着している平織物、及び剣柄に巻かれている繊維はともに絹（家蚕の）である。出土地である日本（九州北部）で作られた可能性が考えられる。

弥生後期の絹製品を出した遺跡もしくは古墳は、すべて北九州にある。したがって、**弥生後期に比定される邪馬台国の所在地としては、絹を出した遺跡の、現時点での分布からみるかぎり、北九州にあった公算が大きいといえる**であろう。わが国へ伝来した絹文化は、はじめの数百年間、北九州で醸成された後、古墳時代前期には本州の近畿地方と日本海沿岸地方にも出現するが、それらは北九州地方から伝播したものと考えられる。（京都工芸繊維大学名誉教授 布目順郎）

◆『論衡』玄菟楽浪。武帝の時、置く。皆朝鮮・穢貉（わいばく）・句麗の蛮夷。殷の道衰え、箕子去りて朝鮮に之く。其の民に教うるに礼義を以てし、**田蚕織作**せしむ。

⇒田は水稻栽培を、蚕織作は桑を育て蚕を飼育し布を織る意味。最新の考古学の知見では水田耕作が北部九州に広がったのは前10～前7世紀頃に遡る。絹織物も同時期に北部九州に伝わったと考えるのが合理的。弥生前期の絹の分布はこれを証明する。



邪馬壹国の物証②ー鉄と水銀朱

鉄と水銀朱を用いた製品も出土



SC08板状鉄製品

鉄
朱

辰韓国、鉄を出す、韓・濊・倭皆従いてこれをとる。竹箭は或いは鉄鏃、或いは骨鏃。

・比恵遺跡の弥生時代の竪穴住居 SC08 から、鉄素材と考えられる板状鉄製品が出土。（最大長 8.6cm、幅 3.1cm～3.83cm、厚さは最大で 1.3cm 。重量は 280.98g）・SC28 からは炒鋼鉄素材が出土。SC28 からは炒鋼鉄素材が、この住居の柱穴からは辰砂が出土。須玖岡本遺跡から水銀朱が出土

真珠、青玉を出す。その山には丹有り。

「丹」即ち水銀朱は辰砂（硫化水銀）を砕いて得るが、松浦川上流～有明海に注ぐ塩田川一帯には九州西部水銀鉱床群があり、水銀鉱床群には多くの「丹生神社」がある。



佐賀・長崎県地図

九州西部水銀鉱床群

- | | |
|----------|---------|
| 1 菜畑遺跡 | 6 波佐見鉱山 |
| 2 金立神社 | 7 丹生神社 |
| 3 吉野ヶ里遺跡 | 8 丹生神社 |
| 4 相浦鉱山 | |
| 5 童男山古墳群 | |

糸島半島の一貴山銚子塚古墳（4世紀ごろか）の石室棺内から鍍金された方格規矩四神鏡と水銀朱が発見されている。これは「水銀を用いた鍍金（アマルガム法）」が北部九州で行われていたこと、水銀を産出していたことを示すもの。同時に鉄製刀剣多数と剣を包む絹布も見つかっている。

銚子塚古墳からは、鉄刀3口短刀1口鉄剣6口剣形鎗身14口鉄鏃14口など、多数の鉄製品も出土している。小林行雄氏は遺跡の年代を4世紀後半としながら、鉄製素環頭大刀について「3世紀に我が国へもたらされたことを考へることも不可能ではない」とする。（『一貴山銚子塚古墳の調査報告書』福岡県教育委員会昭和27年）＊曹操高陵出土の「鍍金鉄鏡」とほぼ同型式の『金銀錯嵌珠龍文鉄鏡』も九州で出土している（伝：大分県日田市のダンワラ古墳）

福岡県と奈良県の比較

諸遺物	県	
	福岡県	奈良県
弥生時代の鉄鏃	398個	4個
鉄 刀	17本	0本
素環頭大刀・素環頭鉄剣	16本	0本
鉄 剣	46本	1本
鉄 矛	7本	0本
鉄 戈	16本	0本
素環頭刀子・刀子	210個	0個
絹製品出土地	15地点	2地点
10種の魏晋鏡	37面	2面
三〇〇年		
三角縁神獣鏡	49面	100面
前方後円墳（80m以上）	23基	88基
前方後円墳（100m以上）	6基	72基



11
鍍金方格規矩四神鏡

邪馬壹国の物証③一硯と刀

文字外交を示す硯の発見

『倭人伝』：「文書・賜遣の物を伝送して女王にいたらしむ」⇒**筆記具が必須**

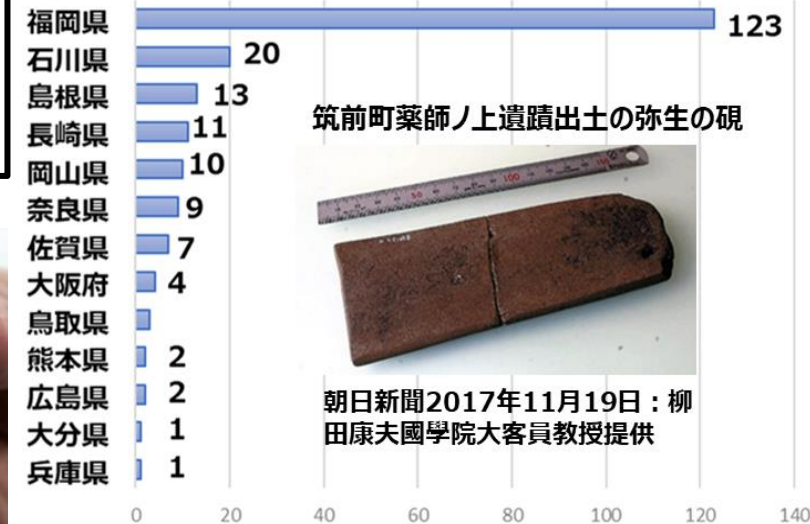
柳田康雄国学院大客員教授らが2016年に三雲・井原で硯を発見、その後福岡で硯の発見が相次ぐ。しかも使用された痕跡があり発見地は福岡県全域に広がっている。

筑前町薬師ノ上遺蹟出土の弥生の硯（弥生後期初頭～前半、AD1世紀ごろ。これは「志賀島の金印」が下賜された時代）には、使用された事示す墨の痕跡が残っていた。また、2017年に**比恵遺跡から出土した硯は**、遺跡の年代から3世紀のものとされており、**俣弥呼・壹與の時代と一致**する。

⇒**筑紫では弥生～古墳初期に文字使用が一般化していた。**



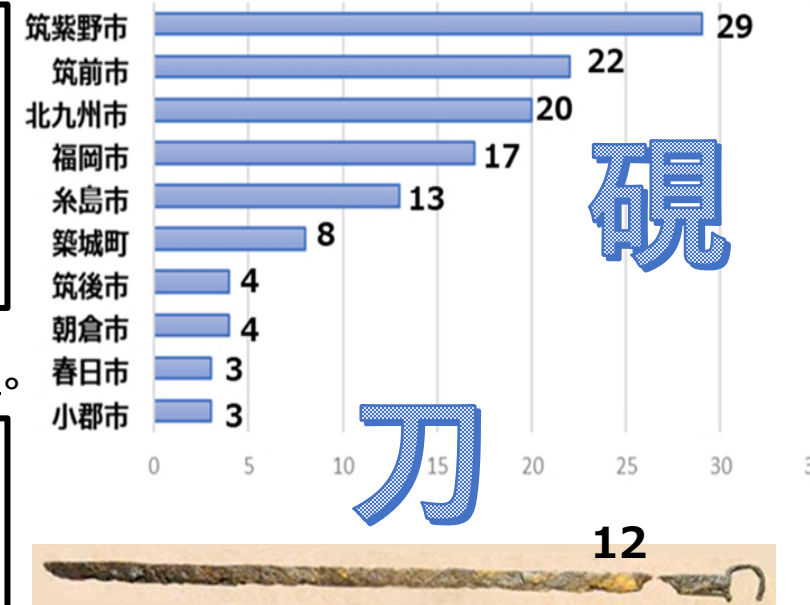
弥生～古墳前期の硯・研石出土数



2020年に柳田教授により、福岡県行橋市の下稗田遺跡で、紀元前2世紀（弥生時代中期前半ごろ）とする硯も発見された。そうであれば「天孫降臨時期」（吉武高木遺跡で我が国初の三種の神器が出土する海人族の筑紫進出時期）と一致。また福岡全域で出土していることは7万戸とされる邪馬壹国の領域の広がり示すものといえる。＊「同時期の硯は福岡、佐賀県の玄界灘沿岸に多数あるとみている」（西日本新聞2020年10月10日、柳田）

五尺刀 **下賜された五尺刀2口**：漢代の1尺は23～24cmだから**120cm程度の刀**。

糸島市前原東の上町向原遺跡から弥生最長の**1189mmの素環頭大刀が出土**。2003年の日本文化財科学会第20回大会で、**1世紀後半から2世紀前半に中国産の鉄鉱石で作られた**ものと発表された。俣弥呼への下賜品の可能性が高まった。



邪馬壹国の物証④一鏡（三角縁神獣鏡は倭弥呼の鏡ではない）

鏡

三角縁神獣鏡ではなく「漢鏡」が倭弥呼の鏡

①「鉛の同位体分析」から魏の年号入りの三角縁神獣鏡は国産。鉛同位体比の $208\text{Pb}/206\text{Pb}$ が $2.12\sim 2.14$ 、 $207\text{Pb}/206\text{Pb}$ が $0.855\sim 0.865$ の鏡は仿製鏡の可能性が高く、三角縁神獣鏡はこの範囲に入る②三角縁神獣鏡は500枚以上出土する。③中国からの出土が無い。④「景初四年」という存在しない年号の銘の三角縁神獣鏡がある。⑤黒塚古墳で重要視されたのは棺内の頭部におかれた画文帯神獣鏡（漢鏡）。棺外の三角縁神獣鏡は位置づけが低い。⑥中国の鏡はほぼ20cm以内で三角縁神獣鏡と合わない

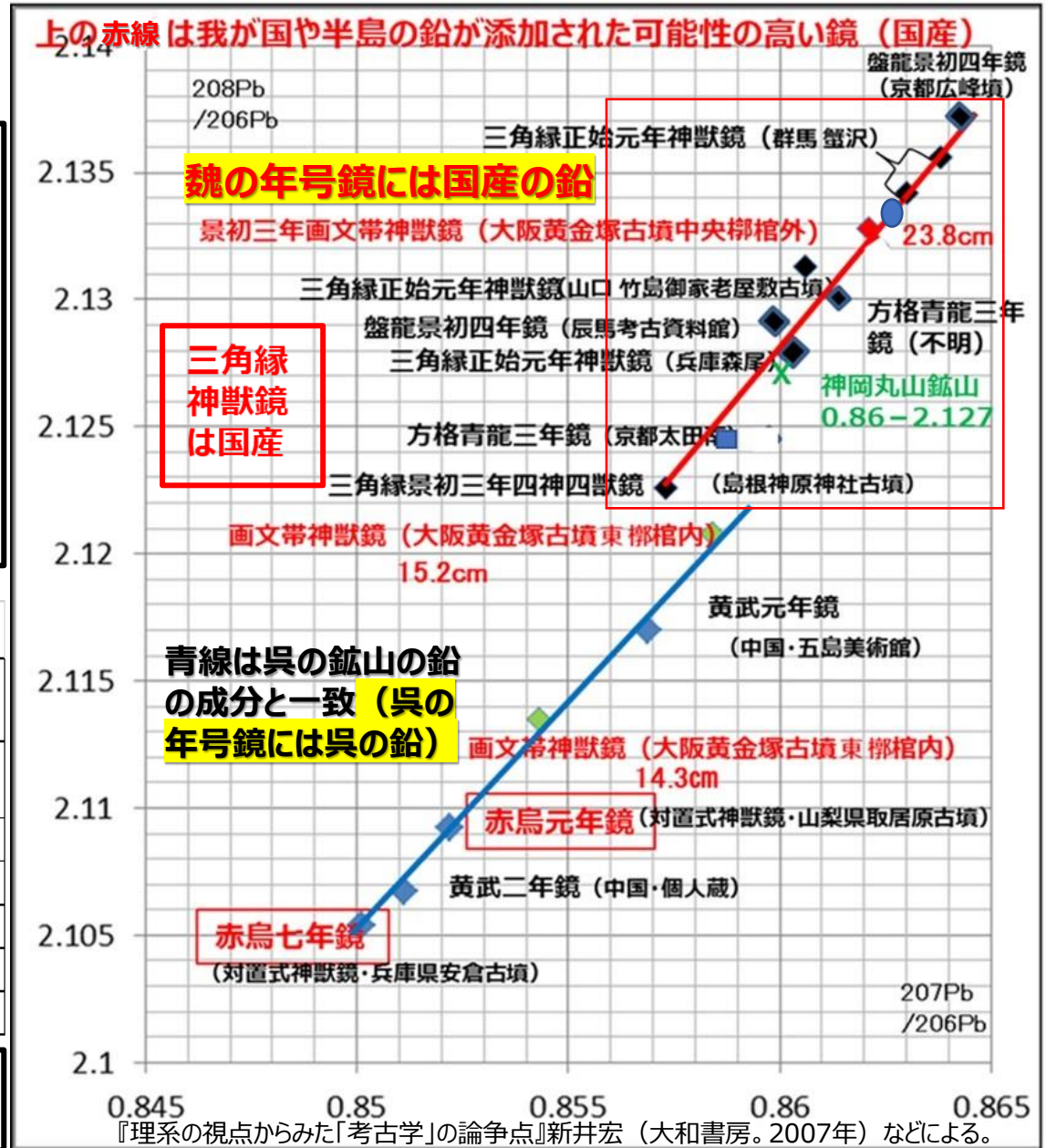
「漢鏡」の宝庫福岡

福岡県出土銅鏡の時代・形式分布

時代推定	形式	甕棺墓	箱式石棺、土壌墓など	古墳時代
前漢鏡	「清白・日光・日有喜・昭明」銘鏡	32面	1面	0
後漢鏡	小形ほう製鏡	2面	18面	1面
	長宜子孫銘内行花文鏡	0	20面	11面
西晋時代鏡		0	16面	26面
古墳時代	画文帯神獣鏡	0	0	4面
	三角縁神獣鏡	0	0	23面



2017年に福岡市博多区井相田の仲島遺跡で完全な形で発掘された「内行花文鏡」（径 11.3cm ）2世紀前半（弥生時代後期）に中国・後漢で製作されたとみられる。



邪馬壹国の物証④一鏡（三角縁神獸鏡は倭弥呼の鏡ではない）

倭弥呼の鏡は20cm以内の漢鏡



曹操高陵出土の鉄鏡
（左）及び同形とされる
「金銀錯嵌珠龍文鉄鏡」
（右）（伝大分県日田
市ダンワラ古墳出土）



弥生遺跡出土泊船載鏡（含む破鏡）

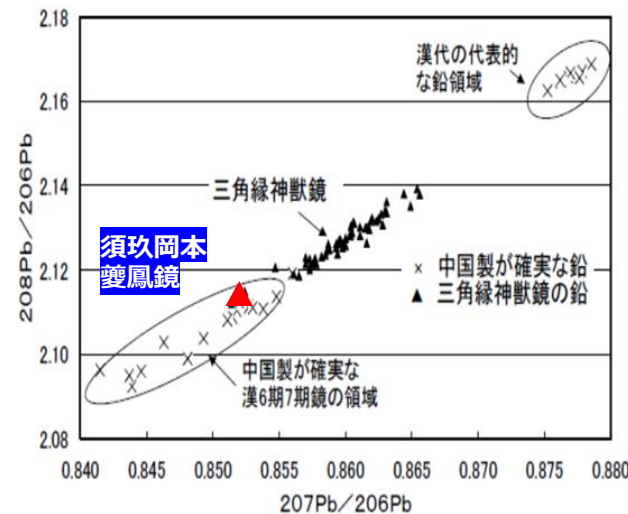
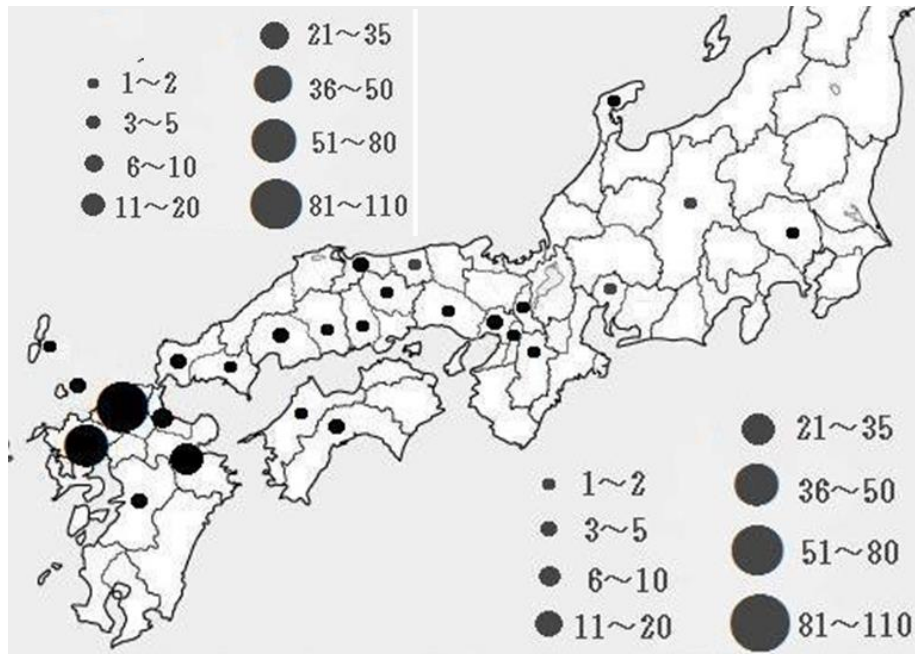
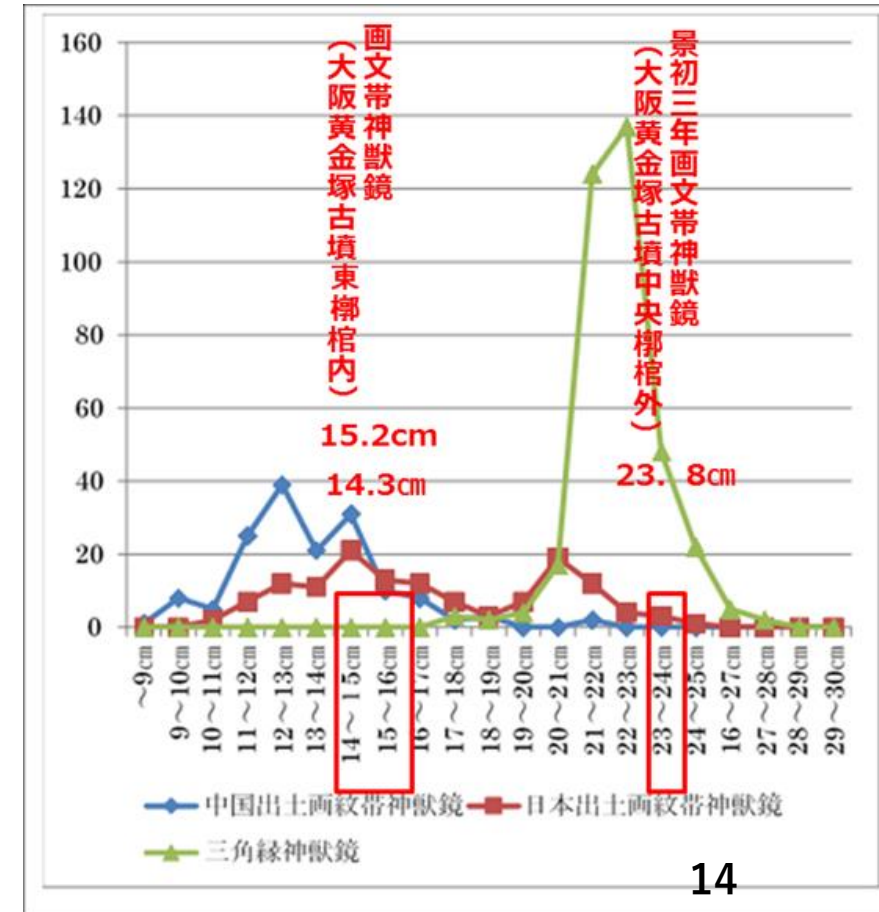


図6 中国製が確実な鉛原料と三角縁神獸鏡の関係(A式)

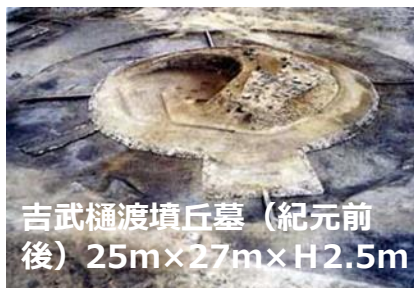
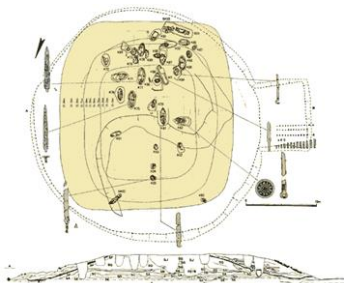


倭弥呼の墓は「箸墓ではない」

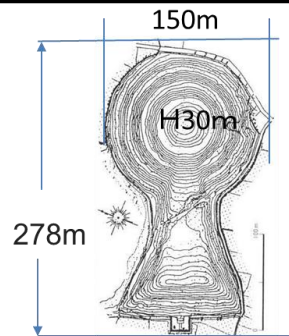
『魏志倭人伝』と合わない箸墓古墳：倭弥呼の墓は「塚」で「径100余歩」

墓

◆『魏志倭人伝』倭弥呼以て死す。大いに冢を作る。徑百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。1里75mで「300歩1里」なら「1歩25cm」、100余歩では25～30m。「径」とあるから「円形」。倭弥呼の墓は「大規模墳丘墓（古墳）」ではなく「大きな塚」の形状と規模となる。*「魏志倭人伝にしたがうかぎり、箸墓古墳が倭弥呼の墓であることの可能性は低い、というよりは証明しがたい」（広瀬和雄）



吉武樋渡墳丘墓（紀元前後）25m×27m×H2.5m



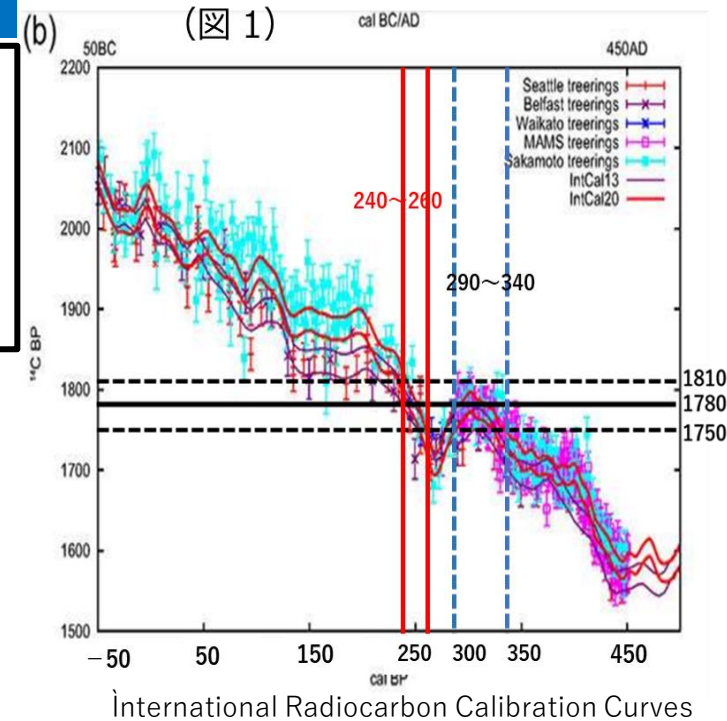
箸墓古墳にはない殉死者の墓群

考古学の知見と合わない箸墓古墳

①倭弥呼の墓の周辺に多数存在するはずの殉死者の墓（甕棺）が箸墓には見えない。②前方部出土の土器（壺）は布留式古相で4世紀を示す。*4世紀後半ごろより大きく遡ることはない（関川尚功）③周濠内から発見された馬具（鐙）は百済の例から早くとも4世紀前半。④楽浪系・三韓系土器の出土がない地域・墓域が倭弥呼の墓域ではない。

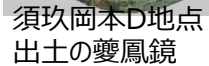
最新のIntCal20校正曲線を用いたC14測定で箸墓はAD300年頃～4世紀前半

箸墓周辺出土の小枝の炭素年代値の平均1780BPは、INTCAL20校正曲線とAD250頃及び4世紀前半で交差するが、4世紀前半がより太く交差するため4世紀の確率が高くなった。これは従来考古学説による箸墓＝4世紀前半築造説と一致する。このINTCAL20の結果は、箸墓築造は従来説の4世紀前半が正しいことを意味する。（INTCAL13では交差しなかった）



須玖岡本遺跡

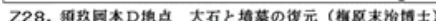
福岡県春日市岡本の丘陵上で、南北2km、東西 1kmの範囲の弥生時代中期から後期の大規模な遺跡群。**巨石下甕棺墓**からは銅鏡（前漢鏡） 32面以上（方格四星草葉文鏡 1、重圏四星草葉文鏡 2、蟠螭（ばんち）鏡 1、星雲文鏡 5面以上、重圏文銘帯鏡 5面以上、内行花文銘帯鏡 13面以上、不明 5面）が出土する王墓級の墓を含む。通説では①『魏志倭人伝』の「奴国の王墓」で、②紀元前後に編年されているが、梅原末治氏はその末年に、須玖岡本遺跡出土とされる夔鳳鏡の編年から2世紀末～3世紀初頭とする。3世紀とされる比恵那珂遺跡との連続性からこの見解は支持される。出土物から「男王か」とされているが、そうであれば**倭弥呼の前代の男王墓の可能性**がある。



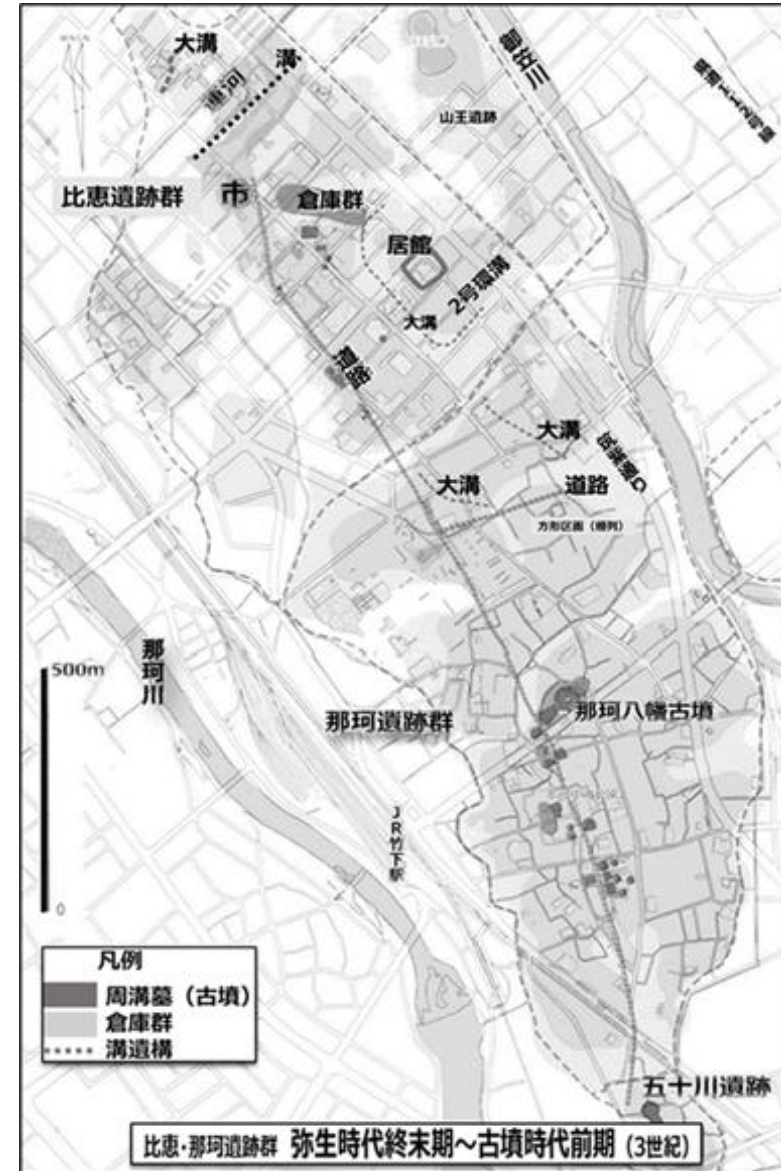
梅原末治[2C後半から3C初頭の3C寄りと編年]「筑前須玖の甕棺内から出た夔鳳鏡の實時代が早くも紀元二世紀の前半に遡り得ない事實よりして 少くも甕棺葬が三世紀の前半になお北九州に行われていたとせざるをえない(谷口古墳調査報告書1935)」(径136mm。鉛同位体比0.8518, 2.1105の後漢鏡)



昭和4年頃の大石の状況（京都大学発掘調査報告書より）



遺蹟・遺物が示す倭弥呼の王都の最有力地は博多湾岸比恵那珂地区



＊「古墳時代における都市化の実証的比較研究―大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地（纏向・南郷等）」総括シンポジウム

三世紀（＊倭弥呼の時代）にかけて、全国でもっとも都市化が進んだ地域は、JR博多駅南の那珂川と御笠川に挟まれた台地上に広がる比恵・那珂遺跡地域である

（福岡市埋蔵文化財課久住猛雄氏）

博多駅の南比恵那珂地区は都市化が激しいが、困難な状況を乗り越えて発掘調査が進展することを期待する。 7